

立教大学池袋キャンパスの建設とヘンリー・K・マーフィー

鈴木勇一郎

はじめに

二〇世紀に入ると日本の多くの主要キリスト教学校は、本格的な高等教育機関への脱皮が求められる中で、キャンパス建設を構想するようになった。もちろんこうした課題は官公私立を問わず、この時期に具体的な課題となっていたが、⁽¹⁾ミッシェンとの関係の中でキリスト教の精神や雰囲気を体现し、本格的な高等教育機関にふさわしい建築を構築していくという点で、とりわけキリスト教学校において教育構想とキャンパス整備は相対的に密接な関係性を持っていた。⁽²⁾

こうした中で、立教学院も大学の池袋への移転と本格的なキャンパス建設を構想するようになった。別稿にお

いて筆者は、その初期段階における米国人建築家ラルフ・アダムス・クラムによる建築計画を検討した。⁽³⁾そこで明らかになってきたのは、ミッシェンと現地キリスト者との関係を軸に、ミッシェンスクールの建築を誰がどのように担うのかという課題であった。そうした関係性の中で池袋キャンパスの設計者として最終的に浮上してきたのが、在米の設計事務所であるマーフィー&ダナ建築事務所であった。

マーフィー&ダナ建築事務所による池袋キャンパスの建築群に関しては、これまでもその経緯について言及したり、⁽⁴⁾建築学の立場からの調査がなされることはあった。⁽⁵⁾しかし、当時この計画に携わった関係者がこのキャンパスをどのように構想し、具体的な工事を進め

ていったのかについて、明らかにされていないことは非常に多い。

一方、設計を担うことになった建築家については、すでに研究が進んできている。とりわけ共同設計者の一人であるマーフィーについては、村松伸^⑥やジェフリー・W・コデイ^⑦が、その中国での建築活動について詳細に分析している。しかしいずれも、その主眼が中国での活動にあるため、立教大学については簡単に触れられる程度の扱いとなっている。

マーフィーとダナという二人の建築家は、現在のところ、国内においては立教大学だけしか作例を確認できていないこともあり、日本ではその名を知られているとは言い難い。同事務所は二人が共同で経営していたが、ダナはハーヴァードやコロンビア大学で建築を学んだ後、フランスに留学したという経歴を持ち、主に米国東海岸で活動を展開していた建築家であった。マーフィーも燕京大学をはじめ、中国では数多くの作品を残し、のちに国民政府の建築顧問を務めるなど、国際的には名前を知られた建築家であった。

日本におけるキリスト教学校の建築に携わったことで知られるガーディナー^⑧やヴォーリス^⑨、モーガン^⑩、レーモンド^⑪といった外国人建築家は、いずれも日本に長年拠点を据えて活動しており、ニューヨークに事務所

を構えたまま、立教大学の建築設計を担ったマーフィー&ダナとは対照的である。

本稿では、米国東海岸で活動していたマーフィーおよびダナ、とりわけマーフィーが、その東アジア進出の過程で、立教大学池袋キャンパスの設計を担うようになり、その建設工事を完成させるまでの経緯を分析することで、日本のキリスト教学校における建築と教育構想との関係を明らかにしていく。

マーフィー&ダナ建築事務所への依頼と基礎計画の検討

立教学院の総理であったタッカー (Henry St. George Tucker) らが、新たな立教大学のキャンパス計画を構想し始めた当初、米国聖公会伝道局側の主導でその設計を担う建築家として浮上してきたのが、米国人建築家ラルフ・アダムス・クラム (Ralph Adams Cram) であった。クラムは当時ゴシック様式を中心に、米国で盛んに活動を展開していた著名な建築家であった。彼はかつて日本の国会議事堂計画で目論んだものの、実現できなかった和風建築を提案してきた。しかし、この提案は日本在住の米国人宣教師や日本人聖公会関係者の容れるところではなかった。

その後、立教関係の建物の設計を数多く手がけてきたガーディナー (James McDonald Gardiner) が新たに計画案を提案した。しかし米国聖公会伝道局が積極的とは言えなかったこともあり、結局これも具体化するに至らなかった。このように、立教大学が新たに建設するキャンパスの設計者は、当時の米国聖公会と日本在住の聖公会関係者たちとの関係性の中で容易に決まらなかった。しかし、その議論を通じて、キリスト教学校の理念を体现する建築様式としては、カレッジゴシックが最もふさわしいということ¹²⁾は、次第に合意を得るようになっていったのである。

そうした状況の中で、設計者の候補として浮上してきたのが、マーフイー&ダナ建築事務所であった。共同経営者の一人マーフイー (Henry Killam Murphy) は、一八七七年コネチカット州ニューヘブーンに生まれている¹³⁾。イエール大学を卒業後、ニューヨークのマスカーレイ事務所 (Atelier Masqueray) に勤務した。その後同じくニューヨークのトレシー&スワートアウト (Tracy & Swartwout) 事務所に移っている。その後、ヨーロッパ諸国を歴訪し、さまざまな建築を実地に見て回った。帰国後、一九〇六年から七年にかけて独立した建築家としての活動を始めた。一九〇八年には、ダナを共同経営者に迎えて設計事務所を開業した。

著名な詩人を祖父に持つダナ (Richard Henry Dana, Jr.) は、ハーヴァード大学の地元であるマサチューセッツ州ケンブリッジに生まれ、そのままハーヴァード大学を卒業した後、コロンビア大学で建築学を修め、その後さらにフランスのエコール・ド・ボザールに留学したという経歴を持つ建築家であった、二人の事務所は数年の間に着実に業績を重ね、規模を拡大していった。当初は住宅などを手がけていたが、次第に学校をはじめとする公共建築にも手を染めるようになった。

初期の同事務所はイエール大学の人脈から仕事を受注していったとされているが、湖南省長沙にイエール大学ミッション (Yale in China) の援助で設立を計画していた医学校 (湘雅医学専門学校) の設計を受注するなど、米国内だけでなくアジアにも手を広げ始めているところであった。こうした一連の流れの中で、立教大学の設計も引き受けることになったようだが、その直接的な経緯は現在のところよくわからない。ただ、二人のプロフィールからも明らかなように、大学で正規の建築学を修め、米国東海岸の第一線で活躍していた建築家であり、ゴシックなど正統的な様式建築の設計を担うことができる建築家として期待されていたようだ。

一九一三年六月二十七日、それまで検討していたクラムやガーディナーに見切りをつけた米国聖公会伝道局交信

幹事 (Correspondence Secretary) ウッド (John Wilson Wood) は、マーフィー&ダナ建築事務所に設計の打診をするに至った。

どうやらそこで事務所側から前向きな反応があったのか、続いて七月一日にウッドは同事務所に書簡を送り、詳細な説明をしている。この中でウッドは、立教大学の概要について触れている。そこでは、立教はこれまでずっと建築資金が乏しかったので、これまで整備してきた建物は、多かれ少なかれ一時しのぎのものに過ぎなかったと述べている⁽¹⁴⁾。これまで整備してきた築地での校舎は、ガーディナーが手がけたものであったが、資金不足によるものという留保はついているとはいえず、その建築には低い評価しか与えていなかったことがわかる。さらに、ガーディナーが作成したと思われる池袋キャンパスの配置計画に対しても「今後数十年先の発展を見越」さず、「全く満足できるものではない」とし、建物の外観についても厳しい評価を示している⁽¹⁵⁾。

米国聖公会の日本における活動に、長年にわたり携わってきたガーディナーに対して、伝道局が、これほど厳しい評価を下している直接の要因は、現在のところよくわからない。ただ、一八九四年の地震で彼の設計した築地の校舎が損壊したことや、彼が正規の建築学の教育を受けていないことなどが影響していた可能性はある。

マーフィー&ダナ建築事務所に設計を依頼するに当たり、ウッドは新キャンパスに必要な建物を列挙している。

- 1、教室と講堂棟
- 2、チャペル
- 3、図書館
- 4、体育館
- 5、事務局棟
- 6、食堂
- 7、寄宿舎
- 8、総長住宅
- 9、日本人教員住宅⁽¹⁶⁾

当時、立教学院は大学だけではなく、中学校も擁していたが、ここで挙げている施設は大学のみである。大学の池袋移転後も中学校は、当面の利便性と将来の土地値上りを期待して、築地に留まるという方針がすでに打ち出されていた⁽¹⁷⁾。そこでウッドは中学校について、二十から三十年くらいは市内の現位置（築地）に留まるので、当面は大学だけの計画でよいとした。規模については、四十年先を見越して全体を配置する必要があるとしつつも、とりあえず寄宿学生八十名を収容できればよいとの見解を示している。もちろん予算が乏しいので、あまり豪華なものや凝ったものは期待できないが、少なくともキリスト教信仰の温かみは感じられるようにして

ほしいなどと要望している⁽⁸⁾。要は、予算は限られてはいるものの、キリスト教大学にふさわしい質の高いキャンパスを望んでいたのである。

その後、七月から八月にかけて、マーフィー&ダナ建築事務所とウッドの間では立教大学建設計画について頻繁にやり取りが交わされた⁽⁹⁾。九月一六日には米国聖公会伝道局とマーフィー&ダナ側が実際に会合を持ち、計画をめぐり具体的に意見を交換した⁽³⁰⁾。事務所側からはマーフィーとダナの両方が出席したが、伝道局側も総理であるロイド (Arthur Selden Lloyd) や交信幹事ウッドをはじめ、主要な役職者が顔を揃えた。この時期、伝道局のトップは総理であったが⁽³¹⁾、交信幹事は各地に派遣した宣教師たちとの通信を扱う役職であり、日本ミッシェンとの関係は、ウッドが実質的に取り仕切っていた⁽³²⁾。

この席で、事務所が作成したプランに対し、聖公会側からはさまざまな意見が提起された。基本的な配置計画自体は、おおむね受け入れられたが、厨房の大きさや図書館と事務局の配置などといった個々の建物に関することから全体の景観に至るまで、さまざまな意見が出たのである。

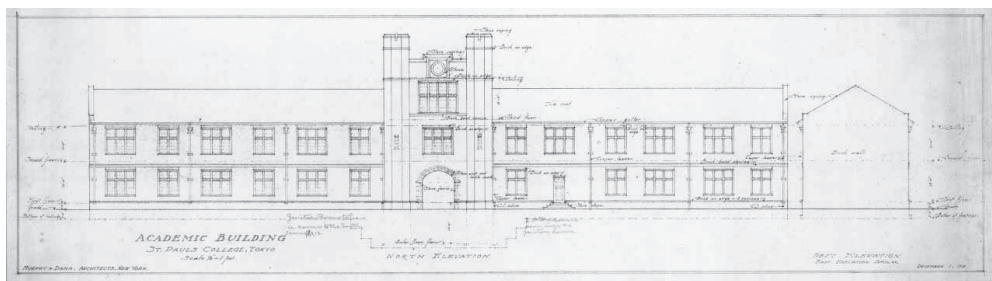
さて、マーフィー&ダナへの依頼決定からこの時点に至るまでの協議は全てニューヨークで行われており、日本人関係者はもちろんのことが在日の米国聖公会関係者

も、実質的に蚊帳の外に置かれていた。

そこで、十月十七日に、東京伝道教区マキム (John Makim) および京都伝道教区タッカーという、米国聖公会が日本に派遣している二人の監督 (Bishop) がニューヨークを訪れたのを機会に、マーフィーおよびダナとの会見が設定された⁽³³⁾。

この席で、建築のデザインについては、総理住宅など比較的細かな点で修正意見が出されたが、キャンパスの建物の基本的な計画に影響を及ぼす建築材料については、突っ込んだ議論が交わされた。ここに提出された原案では、石造りは高価すぎるので、赤煉瓦を使用するべきとの方針が打ち出されていた。この点について説明に立ったダナは、かつての英国のケンブリッジの古い建物や、後期ジョージアン様式のコロニアル建築がそうであったように、赤煉瓦は大学の建築にとってもふさわしい材料であると主張した。これに対しマキムは、基本的に賛同した上で、東京では良質のスレートの入手が困難として、屋根を葺く材料としては、瓦ぶきが好ましいと指摘している⁽³⁴⁾。

以上に見たようなニューヨークでの検討や議論を通じて、壁には赤煉瓦、屋根には黒瓦を使用したカレッジゴシック様式建築という、その後実現を見た池袋キャンパスの基本的な形が固まっていた。十二月にはそれを踏



(図1) マーフィー&ダナ建築事務所作成の本館外観図(1913年12月)
(立教大学立教学院史資料センター所蔵)

また外観図や配置図を作成するなど(図1)、次第に具体像が姿を現してきたのである。

マーフィーの東京派遣と現地調査

しかし、実際に設計を担当していたマーフィー&ダナ建築事務所側は、建設計画をさらに具体的に詰めていくためには、ニューヨークで作業を進めるだけでは不十分であり、現地での調査が不可欠だと考えるようになった。そこでマーフィーは、十一月に立教大学の計画策定のため、自らの日本への派遣を希望した⁽²⁵⁾。

このように外国でミッションによる建物を建設する場合、現地に建築家を派遣して、調査することは、少なくとも米国聖公会では、極めて異例であったようだ。そこで伝道局では、派遣の是非について関係各所から意見を聴取した。その多くは派遣に賛成であったが、中には慎重な姿勢を示す者もいた⁽²⁶⁾。とはいえ、最終的に伝道局はマーフィーの日本への派遣を決定した。

聖公会だけでなく、当時の日本の他教派のミッションスクールの建築を見ても、建築設計のためだけに、外国からわざわざ建築家が日本に派遣されてきたという例は、稀だろう。中国においても、米国聖公会は上海に設立した聖約翰大学で、一八九四年以降次々と校舎を建設

し、キャンパス整備を進めていたが、その設計を担ったのは、やはりアトキンソン&ダラス建築事務所という中国在住の建築家たちであった⁽²⁷⁾。彼らは、上海租界の建設初期から、土木と建築の両方を担ってきた「コロニアル・エンジニア・アーキテクト」の系譜を汲み、上海に拠点を構えて事業を展開してきた人々であった⁽²⁸⁾。二〇世紀に入ると中国ではキリスト教系大学が急増するとともに、本格的なキャンパスの建設を始めており、こうした建物の設計を担うことができる建築家の需要が高まっていたのである。

日本においても、ミッシヨンスクールの建物は明治初期には、宣教師ないしは居留地に在住していた建築家が担うことが一般的であり、その後は日本に在住する外国人建築家が主流を占めるようになった。この時期にはガーデイナーや、ヴォーリズなどが活躍していたが、彼らは本格的に建築学を学んだことがない上に、米国の設計事務所での実務経験がないなど、少なくとも本国から見るとアマチュアに近い建築家であった。そうした意味で、設計の調査のただけに、建築家を現地に派遣したのは、当時の米国聖公会の立教大学に対する期待の大きさを物語るものであった。

来日にあたりマーフィーは、あらかじめ高峰讓吉や「Kushibiki」（櫛引か）、佐野利器といった日本人から助

言を仰ぎ、情報を収集した⁽³¹⁾。ここで名前の挙がっている他の二名とは異なり「櫛引」は、名字だけしか記されていないので、誰のことなのか現段階では確定することができない。とはいえ、かなり珍しい名字ではあるもので、ある程度絞り込むことは可能である。当時在米していた日本人の中では「櫛引弓人」という人物を、有力な候補として想定することができ⁽³²⁾る。

櫛引は当時米国の博覧会を中心に活躍していた興業師であり、高峰もタカジアスターゼの創製で知られる科学者であった。両方とも当時の米国では比較的名を知られていた日本人ではあるが、建築の専門家とは言い難い。マーフィーによれば兩人とも「日本の建築に通じている」⁽³³⁾とのことであるが、あるいは日本の一般的な状況を聞くに留まったかもしれない。

これに対し佐野は、当時東京帝国大学工科大学助教授を務める建築家であり、この時期ドイツ留学からの帰国途上に米国に立ち寄り、現地の建築事務所を歴訪しているところであった⁽³⁴⁾。佐野は建築構造を専門としており、地震が多発する日本における建築について専門的な意見を聞くことが可能であった。

なお、マーフィー&ダナ建築事務所は、二人が共同で経営していたが、一九一四年に実際に日本に派遣されたのはマーフィーだけで、ダナは来日していない。特に来

日以降は関係史料の中にマーフイー単独でサインした書簡を確認できるのに対し、ダナが単独でサインしたものは今のところ見出すことができない。さらに当時の史料に、設計は「建築技師マーフイー氏の手に成れるもの」⁽³⁵⁾という記述もあることから、初期はともかく最終的に立教大学の設計を実質的に担当したのは、マーフイーだと筆者は推定する。

一九一四年四月二十七日に日本に到着したマーフイーは、当時築地にあった立教学院総理ライフスナイダー(Charles Shriver Reidsider)宅に滞在して、約一ヶ月間にわたり調査に当ることになった。翌日、米国聖公会東京伝道教区監督マキムはライフスナイダーを伴い、マーフイーを、池袋の新キャンパス建設予定地に案内した。池袋の予定地を視察したマーフイーは、海拔三百フィートの「健康的な」土地に感銘を受け、この地が聖公会の東京における高等教育機関の中心地として急速に変貌していくことを確信した。その後、マキムはマーフイーを自動車に乗せて東京の主要な街路を案内した。⁽³⁷⁾こうして、マーフイーは建設事業を進めるにあたって必要な情報を集積していったのである。

また、マーフイーのもとには多くの関係者の意見も寄せられたが、その中には和風様式を採用すべきというものもあった。⁽³⁸⁾すでに別稿でも明らかにしたように、当

初米国人建築家クラムによって提案された和風建築案は、計画の検討の中でほぼその可能性が消滅していたが、⁽³⁹⁾この時点では、それを主張する意見も、依然として一部では存在していたようだ。これに対してマーフイーは、恒久的な建築を建てる場合、和風は洋式建築よりもかえって費用がかかることを指摘している。また外国人建築家にとって、和風様式の微妙さを会得することとは大変難しいとも言って反論した。⁽⁴⁰⁾

さらに調査の過程で、具体的な課題も明らかとなってきた。予定地を訪れたマーフイーにとって池袋は、予想していた以上に田舎であり、とりわけ道路の狭さには驚いたようである。そこで、マーフイーは、まず大学に通じる道路を拡張、将来の拡張に備えて学校の入り口を拡張しておくことを提言した。次に直面したのが、良質の煉瓦の確保という問題であった。すでに主要な建築材料として煉瓦を使用するという方針は打ち出されていたが、具体的にその供給に当てがあるわけではなかった。マーフイーは来日して、地震が来てもひびが入らない、赤もしくは暗いチョコレート色の煉瓦を探し出すという課題に直面した。⁽⁴¹⁾

マーフイーが滞在した約四週間に東京で地震を感じることはなかったが、地震への対策が東京で建物を作る際に不可欠な要素であることは認識していた。⁽⁴²⁾東京で

は過去数十年の間だけでもたびたび大きな地震が起り、立教においても一八九四年の地震で築地の校舎が大きく被災するなどの被害を出している。

この問題に関するマーフィーの意見は、堅固さを良質のモルタル、セメント、そして清潔で細かな砂利の使用によって確保しようとするものであった。この他にも鉄筋コンクリートで床を補強するなど、さまざまな方法で建物の耐震性を高めることを目論んでいた⁽⁴³⁾。ところが、こうした仕掛けや工夫は、高度な施工管理が必要であり、現場での監督が極めて重要となってくる。

一九一四年五月七日、マーフィーはマキム、タッカー、ライフナイダーらとこの問題について話し合うため会議を開催した。その席上でマーフィーは、熟練した建築家を招聘して工程の監督 (superintendent) を行わせることを強く主張した。これ自体は出席者の賛同を得られたが、同時にこうした要求に応え得る熟練した専門家は、日本人はもちろん日本にいる外国人の中にも存在しないということでも、出席者の見解は一致した。一方、かつて立教の建築に携わっていたガーディナーについては、その東京における長い経験を生かして、監督建築家の利益となるよう、ニューヨークとの橋渡しとなることは望ましいという意見が出た。この方針もこの席上です承され、ガーディナー自身も引き受ける意向を示し

た。しかしガーディナーの役割は、あくまでも日時を限って相談に応ずるというものであり、その肩書も「顧問建築家」(Consulting Architect) とすることになった⁽⁴⁴⁾。つまり、マーフィーは「日米間の文化や商習慣の違いや、意思疎通の悪さから来る相互の誤解やトラブルをできるだけ防ぐことを願っていたが、同時に自らの主導性は確保することにも腐心していたのである」。

また、建築工事にかかる経費の見積もりをすることもマーフィーの調査の重要な目的であった。これに関連してマーフィーは来日直後からアメリカン・トレーディング・カンパニー (American Trading Company) と接触するようになっていた⁽⁴⁵⁾。ニューヨークに本店を置き、当時世界数十カ国に事業を展開していた同社は、日本名を米国貿易会社 (以下本稿ではこの名称で表記) と称し、横浜と神戸に支店を置いていた。明治時代から陸海軍の兵器や機械、鉄道車両を輸入するなど、商社としてすでに多くの実績を持っていた。さらに同社はこの時期、横浜支店に建築部を置き、専門の技師として R. F. モス (R. F. Moss) が業務に従事するなど、建築事業にも対応できる体制を整えていた⁽⁴⁶⁾。またモスは、トラスド・コンクリート・ステイル社の代理人も兼ねていた。同社は、カーン式と呼ばれる鉄筋コンクリートの専門業者であった。カーン式は、米国人ジュリアス・

カーンが開発した鉄筋コンクリート工法の一つで、カーン・バーという特異な鉄筋に特徴があった。日本では米國貿易会社が代理店となり、一手に輸入販売を手がけていた。施工が容易なこともあり、学校建築を含めて関東大震災前には、日本でもかなり普及した工法であった。⁽⁴⁷⁾

実際に要する建設費用の見積りについて米國貿易会社のモスは、清水組に見積もりを依頼するよう勧めた。⁽⁴⁸⁾さらにチェコ人建築家ヤン・レッツル (Jan Letzel) にも同様に見積もりを依頼した。⁽⁴⁹⁾レッツルは原爆ドーム (広島県物産陳列館) の設計者としてその名を知られるが、一九〇七年に来日して以来、日本に在住して活動が続いていた。⁽⁵⁰⁾

もちろんマーフィーは来日前に、あらかじめ自身で建設計画を作成し建設費を見積もっていたが、清水組およびレッツルの見積もりは、マーフィーの計算をおおむね裏付けるものであった。ところが後述するように、その金額は事前に聖公会側で見積もっていた水準を大きく上回っていた。とはいえ、マーフィーは来日して実地を調査することで、事前の机上の計算の正しさを確認することができたのであった。

このように、マーフィーの日本訪問は実り多いものだったようだ。実は日本を訪れたことのないマーフィー

にとつて、当初はまるで暗闇の中で取り掛かるという状況だった。しかし、日本を直接訪れて実地に調査することで、当初彼が想定していたより数多くの情報を得ることができた。また材料や学校建築に関する規制、地震のデータなど具体的な多くの情報も来日して初めて入手することができたのである。⁽⁵¹⁾

とりわけ収穫だったのは、良質の煉瓦を得る見込みがついたことのようにだ。どうやら来日前には、日本ではこの事業にふさわしい適当な煉瓦を入手することは困難との情報を得ていたようで、来日直後もこれを入手する見込みはついていなかった。だが、約一カ月の日本滞在中に耐水性に優れた「一等品」の煉瓦を安価で入手する見込みがついたことは特に喜ばしかったようだ。実はマーフィーは日本滞在の半分以上の時間をこの煉瓦を探し求めるのに費やしたという。⁽⁵²⁾

彼にとつてそれほど煉瓦の選択は重要な問題であった。苦勞して探し求めた結果、見つけることができたのは金町製瓦株式会社の製品であり、⁽⁵³⁾実際に第一食堂などで同社製の煉瓦の使用が確認されている。⁽⁵⁴⁾同社は、一八八八年に創立後、ホフマン窯を導入した近代的生产システムで急速な成長を遂げ、東京地域有数の煉瓦製造企業となっていた。⁽⁵⁵⁾

また現地の状況の調査や日本人たちとの協議の結果、

東西方向となっていた建物の配置を南北方向にするなど、基本的な配置計画にも変更を加えた⁽⁵⁶⁾。

こうした調査を踏まえてマーフィーは、当初の予定通りのキャンパスを作り上げるためには、少なくとも十二万ドル以上の資金が必要との確信をもつに至った⁽⁵⁷⁾。一九一三年の時点でライフスナイダーは、第一期の工事には七万五千ドルが必要と見積もっていたが⁽⁵⁸⁾、この時期までに調達のできていたのは十万ドル程度に過ぎなかった。すでに、当初の予定より約五万ドル超過していたのである。実はマーフィーは、こうした事態を事前にある程度は予想していたようだが、実際に現地を調査し、現地の専門家の意見を踏まえてそのことを確認したのであった。このように、聖公会側が想定していたよりも多くの費用がかかることが明らかとなった。これを受けとめて、どう対応するかということが聖公会側の大きな課題となった。

とはいえ、マキム以下の在日の聖公会関係者たちは、小規模でみすばらしい建築を望んではいなかった⁽⁵⁹⁾。そこで一九一四年一〇月、ライフスナイダーが再び米国に帰国し、資金調達活動に当ることになった。彼はミネアポリスで開催された米国聖公会の会議で、完成予想図やスライドも用いて、キャンパスの建設にさらに資金が必要になることを訴えたのである⁽⁶⁰⁾。

基本的な計画が具体的な姿を見せるようになったことを受けて、立教大学は、一九一四年六月に第一期計画の概要を公表した。そこで建築様式は「カレヂエート、ゴシック」を採用し「英米に於ける第一流の大学と略同じ⁽⁶¹⁾」ものとなり、まず校舎、寄宿舎、チャペル、教職員住宅、運動場を整備することを対外的にも明らかにしたのである⁽⁶²⁾。

本国の建築家と在地の建築家

資金調達と並んで次の大きな課題は、どのように具体的に工事を進めていくかであった。米国聖公会伝道局では、一九一四年十月九日に勧告委員会(Council of Advice)を開催し、この問題について協議した。

ニューヨークに本部を置く米国聖公会伝道局は、重要事項を決定する機関として伝道局会議を置いていた。しかしこれは三カ月に一度の開催なので、日常的な事項は、月一回開催の執行会議(Executive Committee)で処理していた。ただ、この時期には資金の支払いなどの伝道活動に関わる重要問題を審議するため、伝道局総理の諮問機関として勧告委員会が設置されていた⁽⁶³⁾。当時、伝道局では建設事業のような臨時の重要事項を討議する場としては、議長の諮問機関である勧告委員会がふ

さわしいと判断していたようだ。⁽⁶⁴⁾

この日の勧告委員会で議論されたのは、工事の進行を監督するため、米国から建築家を派遣するかどうかについてであった。設計に当るマーフィー&ダナ建築事務所は、ニューヨークにあり、必ずしも日本の現地の状況に通じていない。これは事業を進めていく上で、安全上も経済上も不利に働く可能性が高いとされた。そこで、米国の請負業者と契約したり、米国から工事を監督する建築家を現地に派遣することが検討されたのである。これらは実際に事業を進めていく上では非常に大きな問題であり、委員会では慎重に検討したようだ。その際この時期に計画が進んでいたYMCA国際会館の建設事業を非常に参考としている。⁽⁶⁵⁾

当時、東京で建設計画が進んでいた同会館は、ウィリアム・メルル・ヴォーリス (William Merrell Vories) が設計を担当していた。ヴォーリスは、日本において数多くのキリスト教学校の建築を設計したことで知られる建築家である。ただし、彼自身は大学では哲学を学び、建築学については専門教育を受けていたわけではなかったこと、一貫して日本に在住して活動が続けたことなど、少なくともそれまでのマーフィーとは対照的なキャリアを持つ建築家であった。

米国聖公会の日本関係文書 (Japan Records) の中に

は、このヴォーリスによるミッション建築のあり方についての意見書が挟み込まれている。この文書は一九一四年四月六日にヴォーリスがYMCA国際委員会の求めに応じて提出した意見書の写しで、「日本におけるミッション建築事業についての提言」という表題が付されている。⁽⁶⁶⁾これは東京で同時期に計画が進行していた国際YMCA会館の建設をめぐる内容で、直接的には、立教に関わりのあるものではないが、米国聖公会が重大な関心を寄せていたことを物語っている。当時、この会館の建設委員長を立教大学校長元田作之進が務めるなど、立教関係者も深くこの計画に関与していた。⁽⁶⁷⁾

この意見書は、日本のような非キリスト教国で、ミッション建築を誰がどのように担うのかについて論じており、当時進行しつつあった立教大学の建築計画にも、その意味で深い関わりをもつ内容であった。

この中でヴォーリスは、外国ミッションが日本で建物を建設する場合、海外の例をそのまま適用するのは不都合が多く、日本の事情に通じた現地にいる建築家の意見を重用することの重要性を強調している。また海外から派遣されてくる建築家に依頼した場合は費用がかさむ上に、現地の事情にも通じていないことが少なくないと指摘している。⁽⁶⁸⁾

さらにヴォーリスは数年前に実際あったこととして、

次のような事例を紹介している。

あるミッションボードが、建築家を海外から送り込んできて計画をたてさせた。彼は理論的には申し分のないプランをたてたが、現地の状況には通じていなかった。また彼は現地よりも派遣元の方に目が向いていた。それ故に彼の設計した建物は、わずかの間に使い物にならなくなったのである。そうした問題も経験豊かな現地在住の建築家を採用すれば解決する。また、現地での監督も地元在住の建築家に依頼することが望ましい⁽⁶⁾。

ここで登場する、海外から送り込まれた建築家が誰のことを指しているのかは不明である。もちろん数年前のこととしているので、アジアではまだほとんど活動したことがないマーフイーを直接指しているわけではない。だが、海外から送り込まれた建築家とは、マーフイーを想起させるものであり、現地で活動するヴォーリズはそれと対照的な役割を担う建築家であった。こうした文書が挟み込まれていることは、当時この問題をめぐって関係者の間に、マーフイーの主導性を牽制する動きがあったことを示唆している。

勧告委員会では、この意見書を参考に議論を進め、ヴォーリズ事務所について「おおむねその仕事は満足できるレベルであったようだ」としつつも、単独の建物で

あるYMCAとは異なり、複数の建物から構成される大学の建築群とは要求される標準化の度合いが異なり、恒常的な監督の必要性もまた次元を異にすることも明らかであるとした。また、かつてヴォーリズ事務所に所属し、その後マーフイー&ダナ建築事務所でドラフトマンとして勤務している人物の話として、「この事務所の仕事ぶりは満足なものではない」との言を紹介している⁽⁷⁾。

さらに、委員会では、長年日本で働いてきたガーディナーについても議論している。そこでガーディナーは、東京で建築について多くの経験を積んで来ているにも関わらず、建築家として、監督者としての仕事ぶりは満足できるものではない。もちろん部分的には資金が不足していたことに起因するものではあるが、結果としてはいい加減で不満足な仕事ぶりだ、などと酷評されている。とはいえガーディナーは日本の建築業のシステムに通じているので、米国から送った設計図と明細書に従えば、事業を管理することは可能であろうと評されている⁽⁷⁾。結局この日の勧告委員会は、執行会議に対し次のように勧告している。

立教大学の建設工事については、その監督のために米国から建築家を派遣することが望ましい。ガーディナーについては、できればマーフイーらが作成した計画を、ガーディナーの管理のもとに遂行する

ようにしたい。⁽⁷²⁾

非キリスト教国で、ミッションスクールの建築を誰がどのように担うのかという問題は、その教派や学校の性格にも関わる大きな問題であった。⁽⁷³⁾ ヴォーリズの意見書が対象としていた国際YMCA会館は、一九一七年に神田表猿楽町に日本YMCA同盟会館として完成している。結果として見ると、この時期に日本国内で設計されたYMCAの会館の設計は全て同事務所が担っている。⁽⁷⁴⁾ また、その後第二次世界大戦後に至るまで、数多くのキリスト教学校や教会などキリスト教関係施設の設計を手がけるようになった。

しかし、当初からヴォーリズが確固たる地位を確立していたわけではなく、マーフィーのような米国在住の建築家などとの比較評価にさらされながら、現地在住の建築家の優位性と意義を積極的に主張し、実績を積み上げていく中で得られたものであった。

またこの時期、ヴォーリズはYMCA関係の施設を足がかりとして、中国への進出を積極的に図っており、⁽⁷⁵⁾ 中国でマーフィーのような外国人建築家たちと、直接的な競合関係にあった。このように、立教大学のようなキリスト教学校の建築は、単に日本だけにとどまらず、東アジア地域における外国人建築家たちの関係性の中で展開していたのである。

資金調達と監督建築家選定問題

マーフィーは米国に帰国後、ウッドに報告書を送付し、これをもとに九月から十月にかけて両者の間で頻繁なやりとりが続いた。しかし既に見たように、資金調達や現地での監督を誰がどのように担うのかという問題について方針が決まらない以上、米国聖公会伝道局として、日本に明確な指示を出せるという状況にはなかった。業を煮やしたマキムは、十月二十四日にウッドに書簡を送り、はやく方針を決めてマーフィーから設計図を送るよう催促している。⁽⁷⁶⁾

結局、マキムに対するウッドの返信は、それから二カ月以上を経た十二月二十八日になって認められている。その中でウッドは返事が遅れた理由を、執行会議で建築工事の監督のために米国から建築家を派遣するかどうかを検討していたからであると釈明している。とりわけ会議のメンバーの何人かはその費用が高すぎると感じていたことが、紛糾をもたらした大きな要因であった。

結局、十二月八日の執行会議では、十一月の勧告委員会の答申とは異なり、監督建築家として米国人を日本へ派遣することは見送り、ガーディナーが現地での相談に応ずることで対処するという方針を打ち出した。

とはいえ、伝道局側としてもこうした方針に確信を

持っていたわけではないようだ。そこでウッドはマキムに対して、もしガーディナーが満足に監督できるとするのなら、“Gardiner”、そうでないなら“Murphydana”と記した電報を二月に開催される伝道局会議までに打電するように要請した⁽⁷²⁾。

二月一日にマキムは“Gardiner”と記した電報をニューヨークに発信した⁽⁷³⁾。マキムはガーディナーを信頼し、擁護する姿勢を明確にしたのである。ガーディナーも既に一月二十九日にマキムに書簡を送り、マーフィー&ダナの基本設計をもとに顧問建築家を引き受ける意向を伝えていた⁽⁷⁴⁾。

ところがこれに対して、ウッドはマキムに電報を発信し、ガーディナーに対して一年間で二〇〇〇ドルの報酬という条件は高すぎるとクレームをつけた⁽⁷⁵⁾。結局、米国聖公会伝道局は三月九日に執行会議を開き、ガーディナーは、フルタイムでなく週数日、時間を区切った仕事にすべきで、年に一二五〇ドルの報酬とすることを決定した⁽⁷⁶⁾。

四月二十三日、マキムはウッドにガーディナーがその条件を受け入れる意向であることを伝えたが、同時に米国から建築家を派遣してきても費用がかかる上に、日本語や現地での習慣も知らないようでは、さらに日本人の助手をつける必要があるなど、決して安価ではない。む

しろ、ガーディナーに任せることでニューヨークから建築家を派遣するよりも少ない費用でよりよい結果を出すことができるなどと、再びガーディナーを擁護した⁽⁸²⁾。

一九一五年五月末になって、マーフィー&ダナ建築事務所から伝道局に図面類が届いたので、ウッドはこれらを日本に発送した。この図面類は六月下旬には日本に到着したようだ。マキムはこれをもとにガーディナーや米国貿易会社、清水組などとも相談しながら検討を進め⁽⁸⁴⁾、この年の十二月には、修正案が一応完成を見た。この際いくつかの工事を見合わせることで、総額二十六万二千二百二十七円（約十三万ドル）に費用を抑制することができるとの見積もりを出したのである⁽⁸⁵⁾。

こうして日本側での修正案を携え、一九一五年九月にライフスナイダーは米国へと赴いた⁽⁸⁶⁾。そこで再び伝道局やマーフィー&ダナ建築事務所と協議した上で、翌年一月、できあがった修正計画を日本に向けて発送した⁽⁸⁷⁾。

これを受けて米国貿易会社を主請負業者として契約を交すなど、一応工事を開始する条件は整ってきた。とはいえ、この時点で見積もられた二十六万円は当面の工事に必要な金額であり、さらに図書館などを建設して第一期工事を完成させるためには、五十万円が必要であると見積もられていた。これを今後三年間で、「完全に調達し得るの確信」を持って、工事を始めることになった

のである。⁽⁸⁸⁾ 逆にいえば資金調達ができていない状況で工事を始めることになったわけで、ある意味危ない橋を渡ることになったといえることができる。

ではこうした状況の中で、なぜあえて大規模な新校舎建設に踏み出す必要があったのか。建設資金募集のためアメリカに帰国したライフスナイダーは⁽⁸⁹⁾、一九一六年二月にボストンを訪れ、教会関係者を前に大略次のようにその意義を訴えた。

立教大学の歴史は、みすばらしい建物のために不幸の連続でした。しかし、今ようやく、正常化への道を歩み始めています。

これまでの適切な計画の欠如は、百鬼夜行の如き奇妙な建築を日本に出現させることになりました。しかし、理想を体现した建築がいかに必要であるということを理解した教会は、さらにこうした状況を続けることを望まなくなったのです。まともな建築がないことは、精神的に誤ったメッセージを日本人に送ることになりかねないのです。⁽⁹⁰⁾

つまり、ミッションスクールの建築はキリスト教の精神を体现するものであり、とりわけ日本のような非キリスト教国でのミッションスクールが発展するためには、その精神をよく体现した適切な建物が必要と認識していたのである。

建設工事の開始とウィルソンの東京派遣

ライフスナイダーは一九一六年三月に米国から日本に帰任したが、この旅で彼は十三万ドルの資金を調達した。⁽⁹¹⁾ こうして当面の建設資金に一応の目途がついたことを受けて、一九一六年五月二九日、池袋では立教大学の建設工事がいよいよ始まった。⁽⁹²⁾

すでに触れたように、マーフィーは工事を円滑に進めるためには、米国から監督建築家を派遣し、現地に常駐して業務に当ることが不可欠との認識を示し、たびたびその要望を聖公会側に伝えていた。⁽⁹³⁾ しかし、聖公会伝道局は予算の問題から積極的とは言えない上に、マキムはガーディナーの役割を重視していたために、実現には至っていなかった。

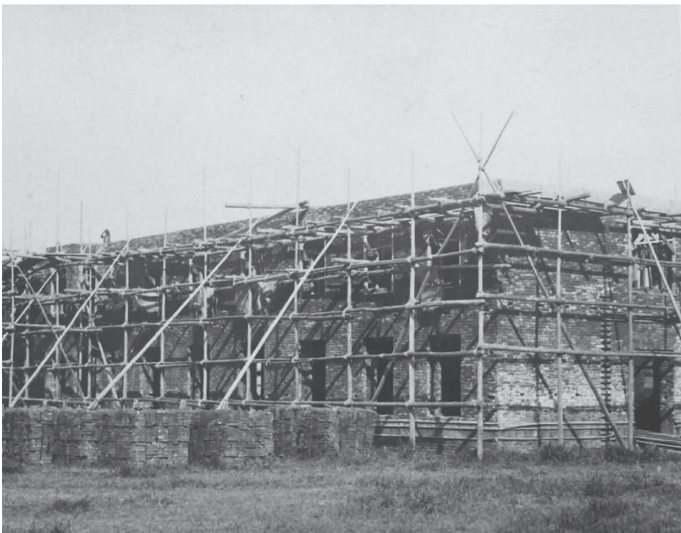
しかし、一九一六年七月、建設工事開始後にライフスナイダーが、ガーディナーを顧問建築家とし続けることを望まないという意見を表明したこともあり、伝道局ではガーディナーとの関係を終了する意向を打ち出した。代わってマーフィー&ダナ建築事務所から専任の監督建築家が派遣されてくることになった。⁽⁹⁴⁾

派遣が決まったのは、ウィリアム・ウィルソン (William Wilson) という建築家であった。ウィルソンは、ニューヨークの建築家グロズベナー・アテプリー (Grosvenor

Atterbury)のもとで実務経験を積んできた上に、聖公会の信徒でもあった⁽⁹⁵⁾。こうした経歴を買われて二十五名もの候補者の中から選ばれた「第一級の人物」がウィルソンであった⁽⁹⁶⁾。

ウィルソンの契約期間は、当初一九一六年一〇月一日から一年間の予定であったが、実際に日本に到着して業務に当るようになったのは、十一月はじめになったようだ。ウィルソンが来日した当時、池袋キャンパスの建設工事は、すでにいくつかの建物が具体的な姿を現す段階まで進んでいたが(図2)、少なくとも一九一六年いっぱいにはガーデナーや米国貿易会社と連絡を取りながら、これまでの事業の進行状況についての調査に忙殺された⁽⁹⁸⁾。

またウィルソンは、日本に到着した当初から権限などをめぐる紛争に直面した⁽⁹⁹⁾。これは事業の進行について伝道局が主導権を握るのか、それとも現地の責任者が主導するのかという問題であった。さらに、彼がマーフィー&ダナ建築事務所を代表するのか、それともあくまで米国聖公会の被雇用者かどうかについても不明確な部分があり、議論が戦わされた。こうした問題は、請負業者である米国貿易会社との間でも起こるなど、事業の進行の過程で何度も浮上していくことになった。いずれも基本的には、誰がどのような形で主導権をとって事業



(図2)「南西から見た東寮 1916年11月1日」(マーフィ文書(MS231 Box4 Folder29) イェール大学スターリング記念図書館所蔵)

を進めていくのかという問題に帰結する。

さらに、マーフィーが作成した見積もりより、多くの費用がかかることが明らかになってきたことも大きな問題であった。こうしたことから一九一七年二月、伝道局は体育館を契約から除外することを認めたが、ウィルソンは契約の続行を主張したようだ。⁽¹⁰⁰⁾ ウィルソンは、予算を減らすことができるプランをいくつか試算し、⁽¹⁰¹⁾ 建設経費節減のためのさまざまなプランを提案している。その中には、食堂と体育館を同じ建物に同居させる案まであった。⁽¹⁰²⁾

こうした建設工事の進行をめぐってマキムは、権限をめぐる解釈の相違などでウィルソンや米国貿易会社、さらには伝道局との関係性に頭を悩ませることになった。⁽¹⁰³⁾ 実際に、一九一七年一〇月にはウィルソンが、辞意を表明するという事件があった。⁽¹⁰⁴⁾ もちろんこれは給与面での不満もあったようだが、これまで見て来たように、日本での彼の位置づけの不明確さもいまだちを増幅させる要因となったことは想像に難くない。

さらにマキムを悩ませたのは、財政上の問題であった。同じころに彼は伝道局のウッドに次のように報告している。

「立教大学の建設事業は悪い事態が重なっている。全ての資材の高騰は請負業者をしてとても契約金額ではやっ

ていけないと言わしめている。ところが自分には財政上の裁量権がない。こうした状況は、米国貿易会社建築部門のモスを非常にいらだたせている。」⁽¹⁰⁵⁾

従来の事業の進行をめぐる紛争に加えて、第一次世界大戦の影響による資材の高騰が追い打ちをかけたのである。その苦衷の心情をマキムはウッドに次のように吐露している。

「あなたの力強い智慧を可能な限り早く貸してほしい。立教大学の建設事業は、これまで私が監督在職中に経験した中でも最も困難な仕事だ。」⁽¹⁰⁶⁾

結局、年が明けた一九一八年二月、マキムは、こうした財政上の困難さからライフスナイダー邸の建設を当面断念することを決断するなど、⁽¹⁰⁷⁾ 事業の縮小を余儀なくされるようになった。

こうした困難に直面しつつも、一九一八年秋にはようやく本館、学生寮、食堂、チャペルが完成し、九月十一日から池袋キャンパスでの授業を開始した。⁽¹⁰⁸⁾ ところがこの時点では、本館に事務局を置いていたため教室が足りなくなり、予定していた入学者の多くを断らなければならなくなった。その状況を打開するために、図書館を早く完成させて、ここに本館にある本部機能を移すことを急いだ。⁽¹⁰⁹⁾

図書館の工事はこの年の終り頃に始まったが、⁽¹¹⁰⁾ この

間メーザー (Samuel Mather) から二万五千ドルの寄付の申し出があるなど⁽¹¹⁾、ようやく資金的な目途が立つようになった。図書館は一九一九年五月に工事が完成し、五月二十七日にはキャンパスの落成式を行うまでにこぎつけることができた⁽¹¹²⁾。その後残っていた体育館の工事も九月には完成し、一九一〇年代に入ってから長らく懸案となっていた立教大学池袋キャンパスの建設はひとまずの区切りを迎えたのである。

おわりに

本稿では、マーフィー&ダナ建築事務所的设计による立教大学池袋キャンパス建設の過程を、ミッションや同時期の他の外国人建築家との関係を軸に検討してきた。戦前日本におけるキリスト教学校の建築は、現地の宣教師や日本在住の外国人建築家が担っていた。その初期の建築は、必要に応じて個別に建設されていた。ところが、二〇世紀に入ると主要なキリスト教学校の多くは、大学計画を中心に高等教育拡充の動きを見せるようになった。その中で一体的なキャンパス計画の構想が練られるようになったのである。とりわけ立教大学は、それまであった築地から、当時まだ郊外であった池袋へと移転し、新たにキャンパスを建設したという点で特異であ

る。キリスト教学校以外を含めて、キャンパスの郊外への移転と総合的なキャンパスを建設した学校は数多いが、関東大震災前のこの時期に郊外への全面移転を実行したところは稀である。

こうした状況の中で、本格的なキャンパスの設計を担うことになったのが、マーフィー&ダナ建築事務所であった。実は日本のキリスト教学校で日本人が設計を担うことはほとんどなかったが⁽¹¹⁴⁾、同事務所のような日本に在住しない外国人建築家が担うということも、例外的であった。立教大学池袋キャンパスでは、和風ではなくカレッジシックを新たなキリスト教大学にふさわしいとして採用したが、マーフィーとダナは、米国の大学で正規の建築学の教育を受け、ニューヨークを中心とする東海岸で活動していた正統派の建築家であり、その建築を設計するのにふさわしい建築家であると米国聖公会では見ていたのである。それまで同事務所は、アメリカ東海岸を中心に活動していたが、一〇年代半ば以降、アジアに進出を図るようになった。立教大学はその手始めであった。

同事務所における日本及びアジアでの活動は、マーフィーが中心的な役割を果たしていた。マーフィーはニューヨークに事務所を構えている上に、それまで日本を含むアジアでの経験はなく、現地の状況に必ずしも通

じていたわけではなかった。当初、マーフィーはニューヨークで計画を作成していたが、次第に現地での調査を希望するようになった。実は、建築家による現地での調査自体が、それまでの米国聖公会ミッシヨンの歴史の中では特異なことであった。だが、その後の建設事業にあたっては、建築家、米国聖公会、立教関係者、請負業者との間でさまざまな紛議が起るなど、多くの困難に直面することになった。こうした問題は、主にマーフィーの現地の情報や経験の不足に起因するところが少なくなかった。

そうした状況を打開するため、ウィルソンという専門の建築家を日本に派遣して工事の監督に当らせたが、それでも多くの行き違いや摩擦を生んだことはすでに見た通りである。工事終了後、ウィルソンは工事が大幅に遅れた理由を列挙しているが、その多くは請負業者、発注者、監督建築家との意思疎通の悪さに起因するものであった。⁽¹¹⁵⁾

マーフィーは、立教大学での仕事に前後して中国や朝鮮への進出を図っていた。東アジア各国におけるプロジェクトに参画していく中で、次第に現地で活動することの重要性を次第に会得していったのである。

その後中国においてマーフィーは、カナダ人建築家ハリー・ハッセイ (Harry Hussey) のようなライバルと

競合し、⁽¹¹⁶⁾ 次第に建築家としての地歩を固めていった。その過程で、中国の伝統様式への造詣を深め、中国建築の様式に近代建築の機能を採り入れた「中国建築復興様式」の推進者となった。⁽¹¹⁷⁾

これに対し、池袋キャンパスは、アメリカのカレッジの影響を受けた正統派のカレッジゴシック様式で建設されている。すでに別稿でも明らかにしたように、この様式は和風との比較検討の中で意識的に選択されたものであり、当時の米国聖公会や日本人聖公会関係者が、どのような様式が日本におけるキリスト教学校の建築としてふさわしいと考えていたのかを示している。これは、立教と同じ米国聖公会が中国上海で設立した聖約翰大学が、中国風の屋根を持つ様式を採用していたことと対照的である。日本と異なり当時の中国では、ミッシオン系を含む多くの大学が、「中国建築復興様式」を採り入れた建物を建設していた。もちろんその際には、様式をめぐめる確執が存在したが、⁽¹¹⁸⁾ 最終的に和風建築を否定してカレッジゴシックを採用した立教大学とは対照的である。マーフィーにとつて、立教での経験は現地の慣行や伝統を学習する必要性を強く認識するようになったという点で、中国で幅広く活動していく上での基礎となったということができる。言い換えると、日本では当初からガーディナーやヴォーリズのような在日の建築家たちと

の比較にさらされたことが、マーフィーが現地の事情をよく精査した上で事業に臨むという姿勢をより強固にしていたといえることができる。

本格的なキャンパス建設を構想していた他教派の関西学院や青山学院が、この時期には不十分か実現を見なかったのに対して、立教大学池袋キャンパスはこれらに先駆けていち早く実現を見た。また、キリスト教学校の以外に目を向けても、東京で高等教育機関の郊外への移転が本格的に進むようになったのは関東大震災以降であり、そうした意味でも立教大学池袋キャンパスは先駆的事例と位置づけることができる。ところがその後、日本におけるキリスト教学校の建築において主導権を握るようになったのは、ヴォーリスのような日本に拠点を構えた外国人建築家であり、結果として、マーフィー&ダナ建築事務所が日本で手がけたのは、立教大学のみとなったのである。

注

- (1) 木方十根『「大学町」出現』（河出ブックス 二〇一〇年）。
- (2) 拙稿「キリスト教学校における大学設立問題とキャンパス計画」『立教学院史研究』七号 二〇一〇年。
- (3) 拙稿「キリスト教学校におけるキャンパスの建設と建築家」『立教学院史研究』八号 二〇一一年。
- (4) 永井均・豊田雅幸「立教のチャペルと関東大震災——発見された十

字架の背景を探る」『立教』一七九号 二〇一一年。

- (5) 立教大学近代建築調査委員会編『立教大学近代建築調査報告書』（一九八五年）。
- (6) 村松伸「二十世紀初頭中国における「中国建築の復興」と西洋人建築家」稲垣榮三先生還暦記念論集刊行会編『建築史論叢・稲垣榮三先生還暦記念論集』中央公論美術出版 一九八八年）。
- (7) Jeffrey W. Cody "Building in China: Henry K. Murphy's "Adaptive Architecture." The Chinese University Press, 2001.
- (8) 松波秀子「シエームズ・マクドナルド・ガーディナーの人と作品」『築地居留地』第一号 二〇〇〇年。
- (9) 山形政昭『ヴォーリスの建築：ミッシェン・ユートピアと都市の華』（創元社 一九八九年）。
- (10) 水沼淑子「ジェイ・H・モーガン——アメリカと日本を生きた建築家——」（関東学院大学出版会 二〇〇九年）。
- (11) 三沢浩『アントニン・レーモンドの建築』（鹿島出版会 一九九八年）。
- (12) 拙稿「キリスト教学校におけるキャンパスの建設と建築家」。
- (13) 以下、マーフィーおよびダナのプロフィールは、"Building in China" pp.17-28に49。
- (14) Wood to Murphy & Dana, July 1 1913, Japan Records 17-1-163 (Japan Recordsの現物は、米国テキサス州オースチン所在の米国聖公会文書館 [The Archives of the Episcopal Church] が所蔵しているが、本稿では日本聖公会管区事務所が所蔵するマイクロフィルムから紙焼きしたものを使用した）。
- (15) Ibid.
- (16) Wood to Murphy & Dana, July 1 1913, Japan Records 17-1-163.

- (17) 拙稿「キリスト教学校におけるキャンパスの建設と建築家」。
- (18) Wood to Murphy & Dana, July 1 1913, Japan Records 17-1-163.
- (19) Dana to Wood, July 10 1913, Dana to Wood, July 24, 1913, Japan Records 17-1-163.
- (20) "St. Paul's College Conference of September 16th", Japan Records 17-1-163.
- (21) 大江満「解題」立教大学立教学院史資料センター編『立教学院150年史資料集 THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成 第3巻』(学校法人立教学院 二〇一一年)
- (22) 大江満氏の「教示」。
- (23) "St. Paul's College Conference of October 17, 1913", Japan Records 17-1-163.
- (24) Ibid.
- (25) "Proposal of Henry Kilian Murphy, Architect to visit to Japan", Japan Records 17-1-163.
- (26) Wood to Lloyd, December 18 1913, Japan Records 17-1-163.
- (27) 上海聖約翰大学校史編輯委員会編『上海聖約翰大学 (1879-1919)』(上海人民出版社 二〇〇九年) 一五一頁。
- (28) 村松伸「上海」藤森照信、汪坦監修『全調査東アジア近代の都市と建築』(筑摩書房 一九九六年) 一八八―一九〇頁。
- (29) 前掲「二十世紀初期中国における「中国建筑の復興」と西洋人建築家」。
- (30) 堀勇良『日本の美術 447 外国人建築家の系譜』(至文館 二〇〇三年) 四一―四三頁。
- (31) Murphy to Wood, February 8 1914, Japan Records 17-1-163.
- (32) 橋爪紳也『人生は博覧会 日本ラネカイ屋列伝』(晶文社 二〇〇一

- 年) 三五―六一頁。
- (33) Murphy to Wood, February 8 1914, Japan Records 17-1-163.
- (34) 佐野博士追想録編集委員会編『佐野利器』(佐野博士追想録編集委員会 一九五七年) 一五頁。
- (35) 「立教大学の移転拡張計画」『基督教週報』二九卷一七号 一九二四年。
- (36) 標高約九〇メートル。池袋付近の標高は五〇メートル前後なので、実際にはせいぜい一五〇メートル程度か。
- (37) "Report of H.K.M.'S visit to Tokyo, Japan", Murphy Papers, MS231, Box4, Folder29, Sterling Memorial Library, Yale University, New Heaven.
- (38) "Report of H.K.M.'S visit to Tokyo, Japan".
- (39) 前掲「キリスト教学校におけるキャンパスの建設と建築家」。
- (40) "Report of H.K.M.'S visit to Tokyo, Japan".
- (41) Ibid.
- (42) Ibid.
- (43) Ibid.
- (44) Ibid.
- (45) Ibid.
- (46) 山口晋一編『諸官省用達商人名鑑 前編』(運輸日報社 一九二〇年) 六〇頁。
- (47) 堀勇良『日本における鉄筋コンクリート建築成立過程の研究』(東京大学博士論文 一九八二年三月一八日) 七九―八四頁。
- (48) "Report of H.K.M.'S visit to Tokyo, Japan".
- (49) Ibid.
- (50) 前掲『日本の美術 447 外国人建築家の系譜』 九七頁。

- (51) "Report of H.K.M.S. visit to Tokyo, Japan".
- (52) Ibid.
- (53) "Murphy Memo", Murphy Papers, MS21, Box4, Folder29
- (54) 立教大学建物実測調査会編『立教大学煉瓦造建物実測調査報告書』(一九九〇年) 一一二頁。
- (55) 日本煉瓦製造株式会社社史編集委員会編『日本煉瓦100年史』(日本煉瓦製造 一九九〇年) 一一八頁。金町製瓦はキャンパス建設途中の一九一八年には、日本煉瓦製造に合併されたり(水野信太郎『日本煉瓦史の研究』(法政大学出版局 一九九九年) 一四一頁)、関東大震災後に大規模な補修工事も実施されているので、現在残っている建物には、これ以外の会社の刻印がある煉瓦も使用されている。なお、金町製瓦の煉瓦の価格は「焼過一等」で一万个あたり一五〇円であったが(河津七郎、吉田全三『建築工事仕様見積』(大日本工業学会 一九一五年)、これは他社の同水準の製品と比較して割高であり(日本煉瓦製造一四五円〔焼過一等〕、小菅監獄一二五円〔上焼過〕)、価格を重視した選択ではなかったことがわかる。
- (56) Murphy to Lloyd, December 15 1914, Records 17-1-163.
- (57) Ibid.
- (58) "Report of H.K.M.S. Telephone Conversation with Mr. Wood" Japan Records 17-1-163.
- (59) "Report of H.K.M.S. visit to Tokyo, Japan".
- (60) "Building in China", p.34.
- (61) 「立教大学の拡張計画」『基督教週報』二十九卷十七号。
- (62) 同右。
- (63) Julia C. Emery "A Century of Endeavor, 1821-1921: a record of the first hundred years of the Domestic and Foreign Missionary Society of the Protestant Episcopal Church in the United States of America" Department of Missions, 1921, p.259, 290.
- (64) 前掲「キリスト教学校におけるキャンパスの建設と建築家」
- (65) "Abstract for the Council of Advice" November 27, 1914 Japan Records 16-8-161
- (66) William Merrell Vories "Suggestion on missionary building operation in Japan" Japan Records 16-8-161.
- (67) 奈良常五郎『日本YMCA史』(日本YMCA同盟 一九五九年) 一五〇頁。
- (68) "Suggestion on missionary building operation in Japan".
- (69) "Abstract for the Council of Advice" November 27 1914, Japan Records 16-8-161.
- (70) Ibid.
- (71) Ibid.
- (72) Ibid.
- (73) 前掲「キリスト教学校における大学設立問題とキャンパス計画」。
- (74) 前掲『ヴォーリスの建築』二二八頁。
- (75) 鄭祖源、山形政昭「東アジアにおけるヴォーリス(W.M. Vories)の建築活動に関する研究: その2 中国関連の現存設計図面の整理・分析を中心」『日本建築学会計画系論文集』六八一号 二〇〇七年。
- (76) McKim to Wood, October 24 1914, Japan Records 16-8-161.
- (77) Wood to McKim, December 28 1914, Japan records 16-8-161.
- (78) Cablegram February 1 1915, Japan records 16-8-161.
- (79) Gardiner to McKim, January 29 1915, Japan Records 16-8-161.
- (80) "Memorandum for Mr. Clark" Japan Records 16-8-161.
- (81) Wood to McKim March 26 1915, Japan Records 16-8-161.

- (82) McKim to Wood, April 23 1915, Japan Records 16-8-161.
- (83) Murphy & Dana to Wood, May 25 1915, Japan Records 16-8-161.
- (84) McKim to Wood, June 30 1915, Japan Records 16-8-161.
- (85) Morse to Reitsnyder, December 9 1915, Japan Records 17-1-163.
- (86) 「個人 ライフスナインダ氏」『基督教週報』第三十二号五卷 一九一五年一〇月二日。
- (87) Murphy & Dana to St. Paul's College January 17 1916, Japan Records 17-2-164.
- (88) 「立教大学の第二期拡張計画」『基督教週報』第三十二卷三十三号 一九一六年一月。
- (89) 「天洋丸の外人客」『東京朝日新聞』一九一六年三月一五日。
- (90) "St. Paul's College and Its President", Boston Evening Transcript, February 19 1916, Murphy Papers, MS231, Box4, Folder55.
- (91) 前掲「天洋丸の外人客」。
- (92) 「立教大学愈々新築に着手す」『基督教週報』第三十三卷十五号 一九一六年六月。
- (93) Murphy & Dana to Wood, September 28 1915, Japan Records 17-2-164.
- (94) Wood to McKim July 2 1916, Japan Records 16-8-161.
- (95) Wood to McKim October 2 1916, Japan Records 16-8-161.
- (96) Murphy to Frazer October 10 1916, Murphy Papers, MS231, Box4, Folder 29.
- (96) "Agreement between The Domestic and Foreign Missionary Society of The Protestant Episcopal Church in The U.S.A. and Murphy & Dana, Architects, for The employment of Mr. William Wilson as Supervising Architect for work undertaken by Murphy & Dana in Japan for The American Church Mission." Japan Records 17-2-164.
- (98) "Memo for the Council of Advice and Executive Committee" Japan Records 16-9-162.
- (99) Wood to McKim November 27 1916, Japan Records 16-8-161.
- (100) Wood to McKim December 27 1917, Japan Records 16-9-162.
- (101) "Recommend alternations to St. Paul's College Buildings having in mind as main object to keep within if possible, our limited appropriation" Japan Records 16-9-162.
- (102) "Proposed Scheme of Combining the Dining Hall and Gymnasium Buildings", Japan Records 16-9-162.
- (103) Wood to McKim March 29 1917, Japan Records 16-9-162.
- (104) Wood to McKim October 16 1917, Japan Records 16-9-162.
- (105) McKim to Wood October 16 1917, Japan Records 16-9-162.
- (106) Ibid.
- (107) Memo February 20 1918, Japan Records 16-9-162.
- (108) 「立教寺設立教大学」『基督教週報』三八卷三卷 一九一八年九月。
- (109) "Request for the permission to build one academic wing for additional class rooms for St. Paul's College, Tokyo" Japan Records 16-9-162.
- (110) "Library Gymnasium and Chapel", The Rikkyo Times, 1919, 5, 31 Murphy Papers MS231 Box4 Folder 30.
- (111) Wood to McKim February 3 1919, Japan Records 16-9-162.
- (112) 『私立立教大学設立教大学新築校舎落成式』Murphy Papers, MS231 Box4 Folder 30.
- (113) 「立教大学の体育館」『読売新聞』一九一九年九月一〇日。

- (114) 拙稿「キリスト教学校における大学設立問題とキャンパス計画」。
- (115) "Proposal and data on the Financial Settlement for the Erection of ST. PAUL'S COLLEGE".
- (116) "Building in China", p.90.
- (117) 前掲「二十世紀初頭中国における「中国建築の復興」と西洋人建築家」。
- (118) 同右。